

見沼代用水

～江戸の繁栄を支えた先進的土木技術の結集・我が国最大の農業用水の誕生～

見沼代用水は、日本最大の流域面積を持つ利根川の中流域から取水し、1728年の建設以来、現在まで、日本の首都である江戸（東京）の北部に位置する広大な農地に用水を供給している幹線延長約80kmの用水路である。

18世紀初頭、八代将軍・徳川吉宗は米の増産によって幕府の財政を改善するため、新田開発を奨励した。本地域では、それまで地域の比較的狭い地形を有効に利用した「溜井」を水源としていたが、その灌漑面積は限界に達していた。吉宗に招聘された「紀州流」の優れた土木技術者、井澤弥惣兵衛為永は、より広域の水源の利用の可能性を検討し、遠方の安定した水源からの導水と既存農地への配水を併せた地域の水条件の抜本的な改善策を考えた。

井澤は1728年に、それまで約5,000haを灌漑する水源であった見沼溜井を廃止し、その敷地を干拓して約1,200haの新田とし、代わりの水源を確保するため、約60km離れた利根川から引水するための見沼代用水（見沼に「代わる」用水）を築造した。国家的プロジェクトとしての見沼代用水の開削は、新田開発（約1,800ha）と既存田を合わせた約15,000haの水田へ豊富で安定した用水供給を可能とし、当時の食糧増産と財政再建に大きく貢献した。

工事は先進的な「紀州流」技術を結集し、わずか6ヶ月という驚異的な短期間で完成した。約60kmもの長大水路を自然勾配で導水するために「水盛器」を用いた精度の高い水準測量が行われ、工事は沿線の村単位に分割して一斉に工事を進める「村請け」により行われた。重要構造物である「元坎」（取水口及び樋管）、流量を制御する「八間堰・十六間堰」、河川横断工の「伏越」（逆サイホン）や「掛渡井」（水路橋）等は当時の最先端の技術で設計・施工され、これまでに例を見ない規模の木造構造物であった。また、パナマ運河完成の約180年も前に築造された閘門式運河「通船堀」は、舟運による広域的物流システムを成立させ、江戸の繁栄を支えた。

見沼代用水は築造から約300年を経過し、コンクリート水路へと姿を変えたが、現在も開削当時と同じ取水地点、路線、自然かんがい方式で埼玉県東部の大地を潤しており、2006年に農林水産省の疏水百選に登録された。「通船堀」についてもその歴史的・文化的価値が高いことから1982年に国指定史跡として登録されている。



見沼代用水元坎鳥瞰図(1880年)



開削時の原風景が残る見沼代用水原形保全区分間



再整備された見沼通船堀で毎年行われる実演



日本国内位置図